

JICA 教師海外研修 授業実践報告書

【実践者】

氏名	水島 一真	学校名	石川県 白山市立 東明小学校
担当教科等	全教科	対象学年（人数）	6年 1組（33名）
実践年月日もしくは期間（時数）	2025年 9月 ～ 12月（31時間）		

【実践概要】

1. 実践する教科・領域：総合的な学習の時間		
2. 単元名と単元目標 単元名： 開こう！国際交流会 単元目標：・課題を解決するために、目的にあった情報を選択し、集めることや、友達と協力して金沢探訪のコースや見学場所について事前に調べ、計画することができる。世界の国々の食文化を調べ、交流することで、その多様性に気づき、日本の食文化と比べることで、自分たちの食生活の特色やよさを理解することができる。【知識及び技能】 ・グループの友達と協力して、インタビューしたい相手に、尋ねたいことを考えたり、質問したり、見学や体験を通して、新たな発見や気づいたことを整理し、まとめたことを相手に分かりやすく工夫して発表したりすることができ、地域や日本の未来を考える活動を通して、自分の考えを構想し、仲間と意見を交流できる。【思考力、判断力、表現力等】 ・学習を通して、分かったことや気づいたことを、自分の考えと生活を関連付けて考えようとする。【学びに向かう力、人間性等】 関連する学習指導要領上の目標： 探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。 (1) 探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究的な学習のよさを理解するようにする。 (2) 実社会や実生活の中から問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。 (3) 探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を養う。		
3. 単元の評価 規準	①知識・技能	①課題を解決するために、目的にあった情報を選択したり、集めたりしている。 ②世界の国々の食文化を調べ、交流することで、その多様性に気づき、日本の食文化と比べることで、自分たちの食生活の特色やよさを理解している。 ③課題を解決するために、友達と協力して金沢探訪のコースや見学場所について事前に調べ、計画している。
	②思考・判断・表現	①グループの友達と協力して、インタビューしたい相手に、尋ねたいことを考えたり質問したりしている。 ②見学や体験を通して、新たな発見や気づいたことを整理し、まとめている。

		③調べてまとめたことを、相手に分かりやすく工夫して発表している。 ④地域や日本の未来を考える活動を通して、自分の考えを構想し、仲間と意見を交流している。
	③主体的に学習に取り組む態度	①学習を通して、分かったことや気づいたことを、自分の考えと生活を関連付けて考えようとしている。
4. 単元設定の理由・単元の意義 (児童/生徒観、教材観、指導観)	【単元設定の理由】 本校では、第6学年の総合的な学習の時間において国際理解学習に取り組んでいる。学習の中では、ALTの先生方との交流を通して、多くの生の声に触れ、日本以外の国や文化について理解を深める機会を設けてきた。しかし、ALTの先生方の母国は先進国であることが多く、発展途上国について学ぶ機会は限られているのが現状である。そのため、児童がもつ発展途上国のイメージは、貧困や不便さといった一面的で否定的なものに偏りがちである。 そこで、本教師海外研修を通して得たタンザニアに関する生の情報や現地の実情を児童に伝えることで、発展途上国に対する見方を広げ、より多面的な国際理解につなげたいと考え、本単元を設定した。 【単元の意義】 本単元では、児童がこれまでに体験した白山ろく少年自然の家での合宿やジオ学習を土台として、改めて地域の自然・文化・観光資源に目を向け、そのよさを主体的に探究し、他者に発信することをねらいとする。そこで、「自ら課題を見だし、主体的に調べ、仲間と協力して考えを深め、まとめ・表現する」という探究的な学びの過程を重視し、児童が興味や疑問を出発点にして地域のよさを調べ、それを新聞・パンフレット・スライドなど多様な方法で表現し、他国の人に発信する活動を通して、主体的・協働的に学ぶ力を育成する。さらに、自分たちが学んだ地域の魅力を「他者に伝える」経験を積むことで、児童がふるさとに誇りと愛着をもち、将来地域と関わりをもって生きていこうとする態度の育成につなげたい。また、単元の中で「食」を扱うようにする。「食」は誰にとっても身近で関心の高いテーマであり、児童が自らの生活と結び付けやすい学習素材である。他国の食文化を知り、日本や地域の食と比較することで、文化的背景や生活の違いに目を向けられるようになる。また、食を通して「自分の暮らし」と「世界の人々の暮らし」がつながっていることを実感することができる。その学びを発信することによって、児童の国際理解を深め、主体的に学びを広げる態度を育むことができる。 【児童観】 本学級の児童は、1学期に白山ろく少年自然の家での合宿やジオ学習に取り組んだことを通して、白山の自然や文化について理解を深めている。その経験から、地域の自然環境の豊かさや魅力を肌で感じ、自分の言葉で語ろうとする姿も見られる。一方で、金沢の兼六園や近江町市場、21世紀美術館などの有名な観光地については名称を挙げることでできる児童も多いが、実際に訪れたことのある児童は4割程度にとどまり、知識としては知っていても体験を伴った理解には至っていない。つまり、地域や県全体のよさについては部分的な理解にとどまり、比較したり、他者に伝えたりする際に具体性	

を欠く傾向がある。児童は調べ学習や発表活動への意欲をもっており、学んだことを深め、発信する活動を通して地域理解をさらに広げていくことが期待される。また、児童は市内全体で推進されている食育の取組の影響から、食に対する意識が高い。家庭科の学習では、健康や栄養に関心を持ち、自分の生活を振り返りながら学ぼうとする姿が見られる。

【指導観】

本単元では、児童が自分の暮らす地域や日本のよさを理解し、それを他者に伝えられる力を育成することを目指す。そのために、「比較・体験・発信」の学習を大切にする。まず、タンザニアなどの他国の自然や文化、生活の在り方を学ぶことで、児童は自分たちの地域や国の特徴を相対的にとらえる力を養う。その後、金沢探訪を通して地域の歴史や文化、まちの魅力を直接体験し、知識を実感に結び付ける。これらの学びを基盤として、日本と他国の未来を考える活動を通して仲間と意見を交流する。そして、最後には市内の ALT に向けて自分たちの思いや考えを発表する活動を設定することで、学んだことを社会に発信する実感を得る。このような学習過程を通じて、児童は「比較して考える力」「自ら体験し理解を深める力」「未来を構想する力」「他者に発信する力」を総合的に育むことを目指す。

指導にあたっては、児童の高い食への関心を生かし、「食」を国際理解の入口として位置付ける。他国の食文化を調べたり体験的に理解したりすることで、自分たちの食生活を振り返り、健康や持続可能性の視点にも目を向けられるようにする。また、「食」をテーマにすることで、児童が学びを自分ごととして捉えやすくなり、発信活動への意欲も高まりやすい。食から広がる学びを通して、地域や日本のよさ、さらには世界とのつながりを実感できる授業を展開することをめざす。

5. 単元計画（全 3 1 時間）

	小単元名	学習のねらい	学習活動	資料など
1	学習計画を立てよう	国際交流会に向けて、計画を立てることができ	学習計画を立てる	
2～8 本時	世界の国について知ろう	世界の国々の食文化を調べ、交流することで、その多様性に気づき、日本の食文化と比べることで、自分たちの食生活の特色やよさを理解することができる。	- 自分のまちのよさを確認する - 世界の国を知る - タンザニアについて知る - 世界の食文化を比較する	バングラデシュやタンザニアの写真 世界の国の食文化が分かる本 ウガリの粉（実物）
9～15	私たちのまちを知ろう	課題を解決するために、友達と協力して金沢探訪のコースや見学場所について事前に調べ、計画している。	- 金沢探訪の計画をする - 金沢探訪を行う	市の観光マップなど

16～ 31	発信しよう	見学や体験を通して、新たな発見や気づいたことを整理し、まとめることができる。 調べてまとめたことを、相手に分かりやすく工夫して発表している。	・国際交流会に向けて資料の準備を行う ・国際交流会を開く	
6. 本時の展開（8 時間目） 本時のねらい：世界の国々の食文化を調べ、交流することで、食文化の多様性に気づき、日本の食文化と比べることで、自分たちの食生活の特色やよさを理解する。				
過程・ 時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態		指導上の留意点 （支援）	
導入 (5分)	1. 問題をつかむ ○日本の食文化はどんなものがありましたか？ ・はしの正しい持ち方がある。 ・有名なのは寿司。		・前時に日本の食文化を確認しておくことで、本時で他国の食文化を調べる際の視点として活用できるようにする。	
調べる (20分)	2. 見通しをもち、解決する <世界の食文化で日本と似ているところはどこかな> ○世界の国と日本の食文化の違いや似ているところはあるかな？ ・有名な食べ物は違う。 ・主食も米じゃないところがある気がする。 ○どんな食文化があるかな（3 グループに分かれる） ・タンザニアの主食はウガリを手でこねて食べるよ。 ・バングラデシュはカレーが有名だ。スパイシーなカレーが多いよ。 ・カナダはメープルシロップが人気だ。お肉をたくさん食べているよ。		・学習対象の自己決定ができるように、気になる国の食文化について調べるように声をかける ・写真・現地でのアンケート・インターネット・先生へのインタビューなど調べる方法を自己決定できるように資料などの準備をしておく。 ・3 グループに分かれる際には、「次の活動で班の仲間に伝える」という目標を伝えることで、一人一人が目的意識をもって意欲的に取り組めるようにする。	
交流 (15分)	3. 考えを交流し、深め合う ○他の国にはどんな食文化があったかな。 ・それぞれの国の食文化について知ることができ、日本と他国の同じところと違うところを見つけることができた。 ・日本にはない他国の食文化の良さが分かったよ。 ・日本の食文化は世界に誇れる部分があると分かったよ。 ○日本と似ているところはどこかな？ ・日本とタンザニアの似ているところは、日本はおにぎりを手で食べ、タンザニアはウガリを手でこねて食べるところだ。		・目的（自分の調べた国の食文化について同じグループの友達に伝える）を明確にした話し合いの場の設定を行う。 ・（支援）世界の国々の食文化を調べる際には、調べやすい写真中心で文字が少ないものにし、視覚的に判断できるものにします。	

まとめ (5分)	4. 学習をまとめ、ふりかえる 日本とタンザニアの似ているところは、日本はおにぎりを手で食べ、タンザニアはウガリを手でこねて食べるところだ。	
7. 資料（教材） バングラデシュやタンザニアの写真（市場での様子や給食の様子が分かるもの） 世界の国の食文化が分かる本（司書教諭にお願いし事前に準備） ウガリの粉（実物）		
8. 評価規準に基づく本時の評価方法 発言やワークシートで行う		
9. 学校外との連携 ※JICA 以外。なければ不要。 なし		
10. 学びの軌跡（児童生徒の反応・変容、感想文、作文、ノートなど） 【授業はじめ】 〈バングラデシュの食のイメージ〉 甘いものが多い 手で食べている 豆を食べている ドロドロしたものを食べている 1日1食だけしか食べない 土器でご飯を炊いていそう 給食はない 〈カナダの食のイメージ〉 メープルシロップを何にでもかけている クッキーをいつも食べている ハンバーガーやパンが多い ジャンクフードが多い 高級なものをたくさん食べていそう 甘いものが好きな人が多い 〈タンザニアの食のイメージ〉 給食はない 外で食べていそう 1日1食（食べる回数は少なそう） 手で食べていそう 辛いものが好きそう 豆が多そう 食べ物が豊富にありそう 肉が好きそう 【授業おわり】 〈バングラデシュの食について〉 日本と飲み物が似ていると思った 日本もおにぎりを手で食べているのでそこは似ていると思った 日本と同じ野菜を使っている 豚肉を食べてはいけない人があると気づいた カレーをよく食べていて日本と似ているところがあると思った（味は少し違うそうなので、食べてみたい）給食があった 〈カナダの食について〉 音を立てて食べるのはダメだというマナーが似ていると思った 思ったより魚を食べていた 魚を生でも食べているところが似ている 日本食がある（寿司など） カナダは給食がなかった 主食は違うけど、パンも日本ではよく食べている よくあるお菓子が似ていると思った 〈タンザニアの食について〉 給食のようなものがある 食べる果物が似ていた ヤギ肉が美味しそうだったので食べてみたい 野菜も似ている 食べる前に手をよく洗うのは似ていると思った ウガリという主食をはじめて知った ウガリを食べてみたいと思った		

【本時または単元について、個人で振り返ったことを記載】

11. 海外研修で何を学び、どの部分を児童生徒に伝えようと思ったか	世界の国々には案外似ているところ・つながっているところがたくさんあることや、違った良さで溢れているということを学んだ。それを児童に身近な「食」の観点から伝えたいと思った。
12. 苦労した点	自分一人では世界のことは伝えられないと感じた。 本時でも、タンザニアに同行した方や、教師海外研修のバングラデシュコースに参加された方、バングラデシュに JICA 海外協力隊で派遣されていた方、カナダ出身の ALT の方などたくさんの方に協力をしていただいた。
13. 改善点	児童が調べ学習中に本を選ぶとき、一人では難しいと感じた。事前に図書館司書に授業中の協力をお願いしておくことで、児童が調べたい内容に合った本の選び方について助言をもらうことができたと思う。そうすることで、本を活用して調べていた児童がより思考を深められたのではないかと考える。 本時ではジグソー法を用いた授業を行った。その際、ホームチームでの活動時間が十分に確保できず、話し合いが途中で終わってしまうグループもあった。今後は、情報収集の時間に 1 時間、情報共有の時間に 1 時間確保することで、より余裕のある単元構成になると考える。
14. 成果が出た点	苦労した点でも述べたように、自分一人ではなく、たくさんの人を巻き込むことでより子どもたちの意欲は増したと感じた。本やインターネットでの調べ学習も大切だが、実際に見たり食べたり感じたりしてきた人の生の声はより子どもたちの印象に強く残っていたように感じる。何よりも世界がより身近になり、他国への興味も増していたように感じた。
15. 自由記述	児童の国際理解を深め、世界への視野を広げたいという思いから参加した教師海外研修は、結果として私自身の価値観や視野をも大きく広げ、学びを深める機会となった。先入観やイメージに左右されるのではなく、現地で暮らす人々の生の声や実際の姿に触れることの重要性を、体験を通して実感した。 また、研修期間中には志の高い多くの先生方と出会い、教育観や実践について語り合う中で、自身の教育に向かう姿勢やモチベーションも大いに高められた。この経験は、今後の教員人生を支える確かな土台になると感じている。これからも国際理解教育・開発教育に積極的に取り組み、研修で得た学びを児童一人一人の学びへと還元していきたい。

参考資料・使用教科書：なし